

バードリサーチ ニュース



2005年6月号 Vol.2 No.6

2005. 6. 16.

Photo by Uchida Hiroshi

活動報告

研究誌 Bird Research 創刊しました！

植田睦之

発行まで時間がかかってしまいましたが、研究誌 Bird Research の最初の論文をWeb上に掲載しました。

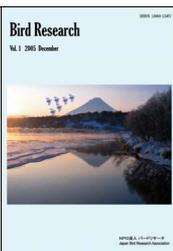
東京におけるヒバリの急激な減少とその原因

植田睦之・松野葉月・黒沢令子

http://www.bird-research.jp/1_kenkyu/journal_vol01.html

論文の要約はどなたでも見ることができますが、全文を読むことができるのは普通会员Aと賛助会員の方のみです。これからも、受理となった論文を順次掲載していきます。12月までに掲載することができたものを1巻の論文として、図書館等への寄贈のために製本する予定です。

第1巻には15～20本程度の論文を掲載したいと考えています。投稿されている論文は、この目標にまだまだ足りません。論文になりそうなネタのある方は、ぜひ創刊巻への掲載をめざして投稿をお願いします。論文作成段階からのご相談が必要な場合は植田(mj-ueta@bird-research.jp)までご連絡ください。



研究誌Bird Research の表紙のサンプルを作ってみました。

バードリサーチが世界を旅するというコンセプト。創刊巻は朝日に飛び立つバードリサーチというイメージです。背景の写真はロシアです。

賛否両論。みなさまはどんな表紙が良いでしょうか？アイデアをお持ちの方はご提案をお願いします。

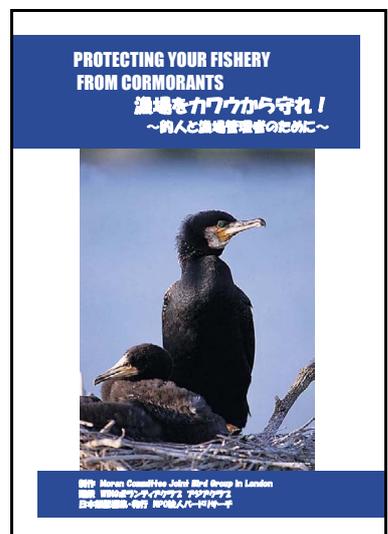
イギリスのカワウ対策のパンフレット 翻訳版まもなく発行します

高木憲太郎

イギリスでも、日本と同じようにカワウによる漁業被害が大きな問題となっていて、様々な対策がとられています。

イングランドとウェールズ地方の漁業と釣り関係の団体を代表するモラン委員会に置かれた Moran Committee Joint Bird Group が、釣り人と漁場管理者に向けて作成したカワウ対策のパンフレットには、日本ではまだ試験段階の対策の事例なども記載されています。

バードリサーチでは、海外の被害防除の事例を紹介することで、少しでもカワウと人との共存に役立つことができればと考えて、このパンフレットを翻訳することにしました。翻訳にあたっては、「WINGボランティアクラブ アジアカラブ」の皆さんの全面的なご協力を得ています。ありがとうございます。まもなく、Web上に公開いたしますので、もうしばらくお待ちください。



翻訳版の表紙。近日公開予定。

会員情報

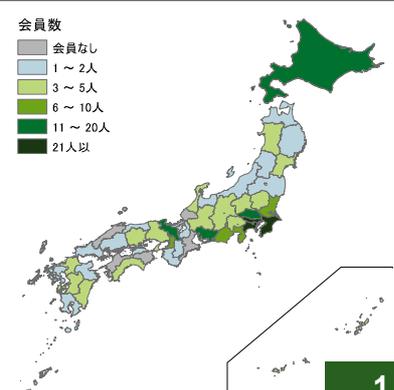
会員数300名突破！

バードリサーチ発足から9ヶ月が経ち、ついに会員数が300名を突破しました。皆さまのご支援・ご協力、ありがとうございます。会員のいない空白の都道府県もだいぶ減り、福井、三重、島根、徳島、愛媛を除く、42都道府県にバードリサーチの会員が広がりました。残りの5県が埋まる日が早く来るように、これからも質の高い活動を展開していきたいと思えます。皆様には、入会だけで満足されずに、ぜひ、バードリサーチの調査プロジェクトにもご参加ください。よろしくお祈りします。

6月9日現在の会員の分布状況。

会員数Top 10

1位	東京	84名
2位	神奈川	33名
3位	千葉	23名
4位	北海道	15名
5位	埼玉	12名
6位	愛知	11名
6位	京都	11名
8位	茨城	9名
9位	静岡	7名
9位	大阪	7名



活動報告

セブン-イレブンみどりの基金から 助成いただけることになりました！

植田睦之

セブン-イレブンからベランダバードウォッチに助成金をいただけることになりました。いただいた助成金はデータを入力管理するWEBデータベースの構築などに使わせていただく予定です。(株)バイトルヒクマにもデータベースづくりを技術支援いただいております。これで全国の情報を迅速に収集し集計する体制ができそうです。助成とご支援、ありがとうございます。



ところで、今、ツバメの調査をしているのですが、ツバメが巣をつくっているコンビニが8つあります。その内の7つが

セブン-イレブンなのです(1つはファミリーマート)。たしかにセブン-イレブンは他社とくらべて多いのですが、それにしても偏っています。「おまえのところだけだろう」との声も聞こえてきそうですが、ローソンの多い関西ではどうでしょう？もし全国的にツバメがセブン-イレブンに多いのなら、今回、助成いただいた

のをきっかけに、全国のセブン-イレブンにツバメの繁殖の有無と飛来日や巣立ちヒナ数をしらべる調査を手伝ってもらえたら、良いデータが取れるな、と考えています。



セブン-イレブンの監視カメラの上のツバメの巣。ヒナが顔を出している。

レポート

鳥たちのチェーン・リアクション カラスからツミへ、ツミからオナガへ

植田睦之

10年という歳月は多くのものを大きくかえてしまいます。原型がなくなると言われていたぼくの髪の毛こそもちこたえているものの、お腹は、ずいぶん形状が変わってしまいました。かわいい学生だった高木くんは、バードリサーチの軸になり、ふとした瞬間におじさんの片鱗をのぞかせるまでになりました(まだまだ子供な部分も多いですが…)。

さて、ぼくは学生時代からツミの観察をしています。いろいろところで書いてるのでご存知と思いますが、ツミの巣の周りにはオナガが集まってきて繁殖します。これはツミが巣をカラスなどの捕食者から防衛するので、ツミの巣のまわりにいればカラスの捕食による繁殖の失敗を避けることができるからなのですが、最近オナガは、どうもこの行動をとらなくなっているようなのです。

ぼくがこの行動に興味を持って調べていた10年前には、ツミの巣の周りには必ずオナガが巣をつくっていました。しかし、ここ2年に観察した4巣のうちオナガがツミのいる林で繁殖したのは2巣のみで、1巣ではツミの巣のそばには

巣をかけませんでした。2つがいのオナガがツミの巣のそばに巣をかけた林でも、ほかのオナガの巣の分布をあわせて見てみると、以前のようにツミの巣のまわりに集中しているような状況ではありません(図1)、繁殖時期をツミの繁殖ステージにあわせるような行動も見られませんでしたので、ツミと同じ場所を使ったというだけで、「集まっていた」とは言えないのかもしれない。10年の間にツミとオナガの関係はすっかり変わってしまったのです。

「なぜ、オナガがツミのまわりに来なくなってしまったのだろうか？」と考えてみると、ツミのカラスへの反応が変わったことに思いあたります。以前はカラスが近づいてくると必ず迎撃にむかっていたのですが、現在では、春に定着し始めた頃は頻繁に攻撃するものの、しばらくすると、よほど近くまでカラスが来ないかぎりには、攻撃することはなくなってしまいました。

調査地ではハシブトガラスが増加しています。頻繁に飛来するカラスにすべて反応しては身がもたないように思います。そういえば、ツミが都市に進出してすぐの80年代は、人が営巣林に近づくと必ず攻撃してきたのが、数年のうちにほとんど攻撃してこなくなったことがありました。これと同じ現象ですね。

話をもとに戻しますが、このように、ツミがカラスの接近に対してあまり防衛をしなくなったので、ツミの巣のそばで繁殖することは、オナガにとってあまりメリットがなくなってしまった。なので、オナガはツミの巣のそばで繁殖しなくなったのだと思います。人が出す生ゴミがカラスを増やし、カラスの増加がツミの行動を変え、オナガの営巣場所選択をも変えてしまったのではないかと考えています。

現在、ツミのカラスへの防衛行動の変化やそれがもたらすオナガの利益の変化について調査しています。結果はまたお知らせしたいと思います。

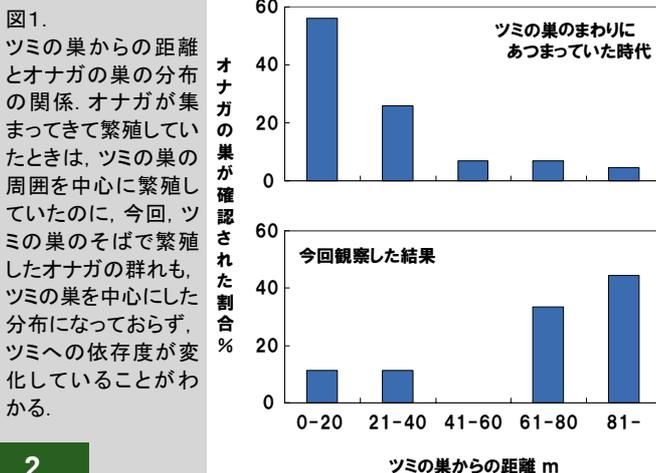


図2. ツミの巣に集まるオナガ
【作画 重原美智子】

最新鳥学情報

生きていた北米最大のキツツキ ～ハシジロキツツキ～

会員の黒沢隆さんから、National Public Radio (NPR)の発行する2005年4月28日の朝刊の記事が送られてきましたので、その一部をご紹介します。

クマゲラより大きい威容を誇るハシジロキツツキは、河川流域に広がる低湿地林だけに見られたが伐採が進むと共に、アメリカから姿を消していった。幻のキツツキを求めて、懸命な調査が行われてきたが、今回まで生息の確認には至らなかった。ビッグ・ウッズ・パートナーシップ・プロジェクトの一環として、キャッシュ・ホワイト川国立野生生物保護区で50名を越す研究者やフィールドワーカーが1年間の集中調査を行なった結果、このたびオスのハシジロキツツキをビデオに捕らえるのに成功した。

NPR 2005年4月28日朝刊 黒沢隆氏による訳文からの抜粋

● ハシジロキツツキとは？

ハシジロキツツキは、北米大陸の南東部に広がる低湿地の広葉樹林にのみ生息していました。体長48-53 cm, 体重450-570 gもある北米最大のキツツキで、ラッパのような大きな声で鳴き、2回続けて叩く独特のドラミングをしていたと言います。周年同じ場所につがいでなわばりを持って枯死した大木に営巣し、樹皮をはがしてその下にいる虫や、枯死した大木の幹や枝に穴を掘り、その中にあるカミキリムシやキクイムシの大きな幼虫を主食としていました。バードリサーチニュース2004年12月号 (Vol.1 No.4) に紹介したクリスマスバードカウントを実施しているオーデュボン協会が、ジェームズ・T・タナーに依頼し1930年代前半にルイジアナ州のシンガー林で実施した調査によると、ハシジロキツツキのつがいが必要とする最小のなわばりは16～23平方キロメートルと推定されています。



図1. ハシジロキツツキ
[Paint by John James Audubon watercolor from 1826.]

● 低湿地林の開発とキツツキの絶滅

ハシジロキツツキが生息していた低湿地林は、定期的に洪水が起こる河川沿いの低地に生育しますが、その豊かな土壌は農地に適していたので、ヨーロッパからの移民が入植すると、農地を開墾するために次々と林は伐採され湿地は干拓されていきました。森林の伐採を加速させた要因には、刈り取り機や中耕機などの農具の性能の向上により耕作できる面積が広がったこと、鉄道が敷かれて輸送が簡単になったこと、さらには、商業目的の大規模伐採が進んだことがあったとされています。

こうして、入植前のミシシッピ川流域に存在していたと推定される8万5千平方キロメートルの低湿地林のおよそ77%は失われてしまいました。残された2万平方キロメートルの林も、そのほとんどが1平方キロメートルに満たない小さな林に分断されました。1930年代にハシジロキツツキが生息していたルイジアナ州シンガー林とサウスカロライナ州サンティー・スワンプの林も、タナーさんの提言も虚しく伐採され、すっかりなくなってしまいました。

伐採跡地は、自然に回復していき、2次林が再生していきましたが、若い林を好むハゴロモムシクイとは違って、枯死した大木の多い老齢の森林を好むハシジロキツツキが戻ってくることはありませんでした。



図2. 今回ハシジロキツツキが発見された場所(●).

● 再発見の記録と画像分析

今回紹介した記事は、絶滅したと考えられてから60年の歳月が経った今、ようやく確かな生存の記録が確認されたことを報道したものです。

ハシジロキツツキを確認したVTRはホームページからダウンロードして見ることができます。画質は褒められたものではありませんが、木の陰から見えた体の一部や、林の間を背を向けて飛んで逃げていく姿を捉えています。Sciencexpresにはこの画像をもとに外見の似たエボシクマゲラとの違いを分析したレポートが掲載されています。私は、その必死さにちょっと笑ってしまいました。【高木憲太郎】

参考文献

Askins, R.A. 2003. 鳥たちに明日はあるか: 景観生態学に学ぶ自然保護. 黒沢令子訳. 文一総合出版. 東京.

Fitzpatrick, J.W., Lammertink, M., Luneau Jr., M. D., Gallagher, T.W., Harrison, B.R., Sparling, G.M., Rosenberg, K.V., Rohrbach, R.W., Swarthout, E.C.H., Wrege, P.H., Swarthout, S.B., Dantzker, M.S., Charif, R.A., Barksdale, T.R., Remsen Jr., J.V., Simon, S. D., Zollner, D.. 2005. Ivory-billed Woodpecker (*Campephilus principalis*) Persists in Continental North America. Sciencexpress 28 April 2005: 1-4.

要約: <http://www.sciencemag.org/cgi/content/abstract/1114103>
PDF: <http://www.sciencemag.org/cgi/rapidpdf/1114103v1.pdf>

野村浩子. 2004. アメリカの鳥類調査: クリスマスバードカウントの紹介. バードリサーチニュース2004年12月号 Vol.1 No.4: 2-3.

NPR 2005年4月28日 朝刊
<http://www.npr.org/templates/story/story.php?storyId=4622633>

参考ホームページ

The Big Woods Conservation Partnershipのホームページ (解説付きのビデオが観られます)
<http://www.ivorybill.org/video.html>

カイツブリ 英: Little Grebe 学: *Tachybaptus ruficollis*

1. 名前

英名は Little Grebe または Dabchick が使われ、古くは Dive-dapper という名前も使われた。(Like a dive-dapper peering through a wave/ Who, being looked on, ducks as quickly in. シェークスピア「ヴィーナスとアドニス」より). 学名の属名 *Tachybaptus* はギリシア語で「速い」の takhus と「下に潜る」の bapto に由来する。一方 *ruficollis* はラテン語で「赤い」の rufus, 「首」を意味する collis からくる。

2. 分類と形態

分類: カイツブリ目 カイツブリ科

全長: 26-33mm 自然翼長: 91-105mm

嘴峰長: 20.6 ± SD 1.5mm (N=38)

ふ蹠長: 35.6 ± SD 1.7mm (N=9)

体重: 160-214g

※筆者らによる雌雄混合の計測値。実際にはオスがメスよりも少し大きい。



図1. カイツブリの足指

形態は水中で遊泳するのに適応しており、足の付く位置が体の後ろに偏り、足指にはヒレ状の水かきが発達する(図1)。ヨーロッパの亜種では目の虹彩が暗赤色であるのに対して、*poggei* では黄色である。

羽色: 雌雄同色で、夏羽は頭が黒褐色で首が赤褐色。冬には概して淡色になる(図4)。眼の前のクリーム色が特徴。ヒナは独特の縞模様がある(図2)。



図2. ヒナを連れたカイツブリ。
[Photo by 足立友克]

鳴き声: 短い鳴き声も出すが、特徴的なのはケレケレケレ...と甲高い鳴き声である。

3. 分布と生息環境

分布: カイツブリはアジア、ヨーロッパ、アフリカの旧大陸に広く分布する。北海道から沖縄にかけて生息する亜種 *T. r. poggei* は、日本の他、中国大陸、朝鮮半島、台湾、千島列島にも分布する。

生息環境: 河川の下流域、特に湖沼に生息する。とりわけ抽水植物や浮葉植物が繁茂する湖沼や溜池に多い。

4. 生活史

繁殖システム:

オスメスが巣作りからヒナの給餌までを共同で行う。しかし、筆者らの観察では、育雛期間の間に親の一方が姿を消し、残された親だけが最後までヒナに給餌することもしばしばあるようだ。孵化後のヒナは親鳥の背中に乗ったり翼の下に隠れたりする。

巣: 巣は古来「にお(カイツブリの古名)の浮き巣」と呼ばれてきた。浮葉植物や抽水植物の中で、植物を集めて浮き巣を作る(図3)。水上に浮き出ている下には大きな基部があり、基部では直径50から最大60cmにまで達する。

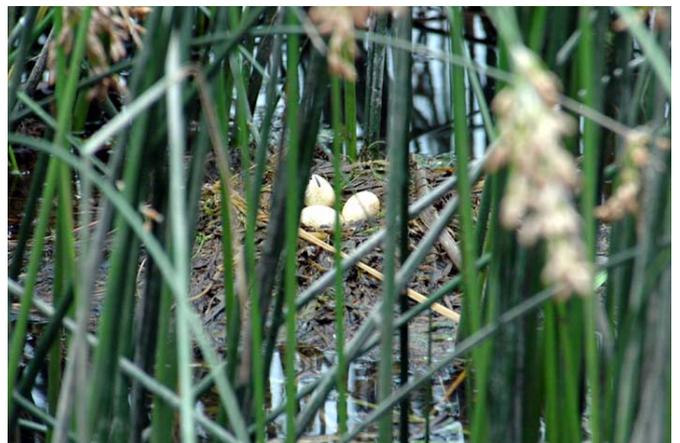


図3. カイツブリの浮き巣と卵。[Photo by 足立友克]

卵: 一腹卵数は3~6個で、大きさは38×26mm程度。産んだ当初は白いが次第に黄色く汚れる。

抱卵・育雛期間:

抱卵は両性によって行われ、抱卵期間は第1卵または第2卵産卵から始まる。抱卵日数は21~24日にわたり、平均は22.6日である(渡辺 1993)。産卵と同様、孵化も数日かけて行われる。

年に複数回繁殖する。2回が多いが、北方の生息地では1回のみが多いようだ。

渡り: 目覚しい渡りはしないが、北方で繁殖する個体の多くは結氷を避けて南方へ移動する。

5. その他、食性

ヨーロッパに生息する亜種では、むしろ主食は水生昆虫だと紹介されることが多い。日本の亜種では小型魚類のほか、昆虫やエビなども食べており、様々である(長谷川 1981, 渡辺 1993)。ときに水面上や、稀には空中のエサをとることもあるが、潜水して採餌するのが普通である。透明度の高い池では、水面に浮かびながら頭部だけを水中に漬け、水面下の様子を探る行動も見られる。なお、東京都井の頭公園の池にすむカイツブリは、人がコイに与えたパンを食べることがある。

6. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

●移動

飛ぶのが苦手な鳥ではあるが, 前述のように冬期の前に移動を行うばかりでなく, 特に繁殖期のはじめ頃には池から池へ, 頻りに居場所を変えているようだ. 春先に池の結氷が解けると, また, 秋に水抜きされた水田に導水のために水が溜められると, めざとくカイツブリがやってくる. しかも, ある池にしばらく居たかと思うと姿を消すことがしばしばある. 理由は不明だが, ある池でいったん繁殖を始めると, ヒナが独り立ちするまではここで給餌しつづけるしかないカイツブリにとっては, どの池で繁殖するかを決定することはきわめて重要な問題だろう. エサの組成や密度などは溜池ごとに異なっている. 従って, 池ごとのエサ条件を見極めるためのサンプリング行動(これに加えてカイツブリ個体間の干渉もあるだろう)ではないかと筆者は考えている.

●減少の問題

本種は近年減少傾向が著しい(須川 2001, 嶋田ほか 2005). 環境庁自然保護局生物多様性センター(1999)によれば, 1978年から1998年の20年間に繁殖記録が大きく減少している. 原因としては, 繁殖に必要な水草帯の消失や溜池の減少もあるが, 魚食性の外来魚オオクチバスの蔓延によって, 主要なエサである小型の魚が激減していることが指摘されている. もちろん, バス自身も魚である. 池にはバスの大きな個体ばかりでなく, バスの稚魚だっているだろうと思われるかもしれない. しかし, バスは非常に成長の早い魚であり, その年生まれのバスは, 秋にはもはやカイツブリの捕食可能なサイズを超えてしまっている. カイツブリがバスを食べて生活することはできないのである.

●カイツブリと魚類の関係

まだ学会発表の段階だが, 小型魚類とりわけ紡錘型の体型をもつモツゴなどがカイツブリのエサ環境に重要であることを野外調査と室内実験の双方から調べている. オオクチバス(通称ブラックバス)の移入は小型魚類を減少・絶滅に追い込み, カイツブリなど小型の魚食性鳥類のエサ環境を悪化させる. 一方, たとえ密放流されてもバスが増えることができず, 小型魚類の豊富な池もあるが, それはどのような条件を備えている場合か, 追究の課題である.

●カイツブリと私

以前に, 青森県内でモツゴ(小型の淡水魚)の生息状況を調べていたところ, 「この池にはカイツブリがいるから多分モツゴがいるよ」と経験的に学生たちと話し合っていました. その後, カイツブリの全国的な減少の一因としてオオクチバスの生息域拡大が指摘されていることを知り, 魚と鳥の関係を明らかにする実際例として扱うようになりました.

カイツブリは見ていて飽きない鳥です. 3年前には, 孵化後の早い段階で連れ合いに去られたカイツブリの必死の

給餌活動を, 終日見ていました. ひたすら潜っては魚(ほぼ全てモツゴです)を捕ってヒナに与える姿には涙ぐましいものがありました. ひとしきり活動したのち, とうとう眼をつぶって居眠りを始めた

(周囲でヒナたちは騒いでましたが)ときは, 「お母さん(お父さんだったかも), お疲れなんだ!」といたく同情してしまいました. ちなみに, カイツブリのヒナは, 体サイズの割に声が非常に大きく, 騒々しいくらいです. 一日じゅう, ヒナたちの「エサよこせ」を聞かされている親も大変ですね.

潜水上手のカイツブリは, その一方, 飛ぶことは下手です. 波を蹴立てて水面を「飛ぶ」姿をよく見かけますが, これはむしろ「走っている」感じです. にも関わらず, 池から池へ, 意外にしばしば移動していることは間違いありませんし, 結氷を避けて季節移動も行っているのも確かです. 「大空を翔けるカイツブリ」, 見たいものです.



図4. 雪の中のカイツブリ(冬羽个体).
[Photo by 石田忠義]

7. 引用文献

生態についての詳しい研究報告:

- 長谷川博. 1981. 深泥池のカイツブリの採食活動—1978年夏の状況—. 深泥池学術調査報告書 pp. 283—290. 京都市文化観光局.
- 渡辺央. 1993. カイツブリの繁殖生態. 長岡市立科学博物館研究報告 28: 73—90.

個体数の減少に関する文献:

- 須川恒. 2001. 琵琶湖のカワウ問題から見えること. 野鳥 647: 7—9.
- 嶋田哲郎・進東健太郎・高橋清孝・Aaron Bowman. 2005. オオクチバス急増にともなう魚類群集の変化が水鳥群集に与えた影響. Strix 23: 39—50.

執筆者

佐原雄二 弘前大学農学生命科学部教授

魚の生態・行動と, その捕食者となる鳥の生態・行動を研究している. もっとも好きな鳥はアオサギである. アオサギをはじめサギ類の雑学, とくに文学に登場するサギについても関心を持つ. 主要著書: 「さかなの食事」(岩波書店 1979年), 「魚の採餌行動」(東京大学出版会 1987年), 「メダカとヨシ」(共著 岩波書店 2003年), 「フィールドワークは楽しい」(共著 岩波書店 2004年)



活動報告

1. 東京バードフェスティバル出展報告

5月14, 15日に東京港野鳥公園で開催された「東京バードフェスティバル2005」に出展しました。ブースでは、バードリサーチの活動の紹介を展示したり、ニュースレターを置いて見てもらったり、ベランダバードウォッチと季節前線ウォッチのパンフレットを配布したり、BirdBase Note (野鳥の観察記録を入力管理できるデータベースソフト)の体験コーナーを設けて来訪者に触ってもらったり、カワウのカラーリングの制作体験コーナーを設けて、実際に自分で作って、それをプレゼントする企画を行なったりしました。



カラーリングを作る家族

カラーリング制作体験コーナーは人気が高く、お子様連れのご家族や、探鳥会のリーダーさんなどが解説用にと、大勢訪れて順番待ちができることも。結局準備していたリング用のプラスチック板は2日間で全部なくなっていました。

BirdBase Note の体験コーナーには、パソコンを用意したのですが、テントの背後のモミジの木から大量のアブラムシが落ちてきて、お腹の蜜でベタベタになってしまうので、困ってしまいました。閲覧用に置いていたニュースレターもベタベタ。会場の入り口に近く、場所的には良い方だったのですが、背後に思わぬ敵がいました。



BirdBase Note体験コーナーは、すぐにでも使ってみたいという熱心な方達が何組かやってきて、じっくり話を聞き、触っていききました。

ハイキングがてら訪れていたお客さんも多かったのですが、「調査」と聞くと去ってってしまう方もいましたが、熱心に展示を見たり、質問したり、入会したりしてくれた方も多く、設立後半年の団体としては良い宣伝になったと思います。

いくつかの団体が出展していたのかわかりませんが、大学のサークルから、自然保護団体、双眼鏡や書籍、ピンバッジ等の鳥関係のグッズなどの商品を扱っている企業などがブースを構えていて、団体間の情報交換ができたことも良かったです。個人的には、他では買えないグッズを買うことができたのが良かったです(というか、お祭りの雰囲気呑まれて衝動買いしたようなものですが…)。【高木憲太郎】

2. 洋上バードウォッチング報告

5月14日に東京バードフェスティバルの企画イベントのひとつである東京港クルーズ「洋上バードウォッチング」の講師を務めました。これは二つのお祭り(「東京バードフェスティバル」と「東京みなと祭」)の協力企画で、東京みなと祭の2つの会場を結ぶ海上バスの上からバードウォッチングを楽しんでいただこうというものです。カワウのコロニーがある第六台場のそばを通るということもあって、講師の依頼がバードリサーチにきました。

300名ほどの乗船者のうち20名を対象に、海上バスの屋上デッキの一角で、まず双眼鏡の使い方から説明することになりました。でも、船の上で初心者には双眼鏡の使い方を教えるのは難しく、まして、飛んでいる鳥を双眼鏡の視野に入れるのは至難の業。「双眼鏡を目から離して、まず肉眼で確認してみましょう」と船のエンジンや排水音、乗船者全員向け船内放送に負けじと叫んでも、おもちゃを手にした子供のように、みんな双眼鏡をあらぬ方向へ振り向けるばかり。

それでも、レインボーブリッジやお台場公園、飛行機などの誘惑に負けずに、周りに集まってくださった10名ばかりの参加者を相手に、浜離宮から第六台場に引っ越してきたカワウやサギたちのお話などをしました。繁殖後期でヒナへの給餌が忙しい大型の鳥が行き来してくれたのは、初心者向けには本当に助かりました。カワウさんありがとう。

他にも、キョウジョシギやキアシシギなどが目には入りますが、船は動く、う〜、いないことにしてしまえ!と、割愛。40分ほどでみなさん下船。担当者と私たちだけになった船の上、青空をバックにスイスイ飛び回るコアジサシ。こんな見たら、みんなもっと喜んだらうにと、少々うらめしく眺めていました。カラカラに渴いた喉に、つかの間の休息が訪れます。

洋上バードウォッチングは朝から昼過ぎまで連続3回行いました。大型の水鳥の子育ての様子を見て、驚いたり喜んだりしてくださったお客さんのお礼の言葉が嬉しかったです。【加藤ななえ】



第六台場の鳥を観察する参加者と講師を務めた加藤(右から1人目)。奥に見える白い橋はレインボーブリッジ。

バードリサーチニュース 2005年6月号 Vol.2 No.6

2005年 6月 16日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 I-102

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: info@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎